

「寮のおじさん」

(一九九九)

、66年入社した新入社員は希望すれば会社の独身寮が用意されていた。当時としては最新鋭のおしゃれな寮だった。180人収容で大食堂、大浴場、卓球室、図書室、談話室等があり、庭には専用のテニスコート・バレーボールコートが何面もあった。チーム暖房完備の個室、それにベランダからは常盤公園の森と湖が眼下に望めた。何よりも年配の寮監さんがいて若者達の相談役にもなり又寮生への電話の取次ぎも行っていた、この寮監さんが構内の庭を花々で飾り、市の花壇コンクールではいつも入賞するほどの華やかさだった。

寮では年内何度かは社内の女子社員を招いての音楽会、雛祭り、七夕、クリスマス等の集いがあり、今で言えば「婚活」が当たり前のように行われていた。この地方都市での女子社員にとって、この会社の男性新入社員は彼女達の最も効率の良い獲物でありその目はギラギラ輝いていた。入寮規定には外部からのお客さんとの面会は食堂又は談話室で・・・とあつたが、僕は勇気を出して何度も内緒で部屋に彼女を招待し、見事な森と湖の眺望を満喫したものだ。

「」で二年位お世話になつたが、実家が近くだったし、その後結婚もし、寮とは縁が切れたが、48才の時東京での仕事を終え、宇部勤務になつた時、家族を東京に残しての逆単身赴任生活をこの寮で過ごすことになつた。四半世紀を経て寮の様子は様変わりしていた。

個室は1・5倍の広さになり、180室あつた個室は120室になり、各室には電話・エアコンが完備し、大浴場も循環式で二十四時間入れるようになっていた、僕にとっては朝風呂に入れるのが何よりも快適だつた。テニス・バレー・コートは一面だけを残し潰され、若い寮生の殆んど全員が持つてゐる乗用車の大駐車場になり、合理化で寮監さんはとつくにいなくなり、人事課の係員が時折監視に来ていた、何よりも寮監さんのがいない寮の花壇や中庭は荒れ放題になつており寂しかつた。

人事課といえば思い出すのは、当時、若い寮生が女の子を寮に呼び寄せるという「不謹慎」な事件が流行つてゐた。人事課は慌てて文書通達・張り紙等で注意を呼びかけたが全く効果は無く、以後しばらく人事課と若者達の壮絶な戦いが始まつた。単身赴任の私は朝が早いから、早朝女の子が一人で寮から出て行く姿や、二人で車に乗り込む姿を目撃し、又夜は二人連れが玄関から入らず非常口・屋外階段からそつと入つて來たり、時には洗面所で女の子が食器を洗つてゐる風景を何度も目撃した。

最年長だった私は人事課から事件打開の相談を受けたが、若い寮生の名前は知らず、かといって目撃時に直接注意するのも出過ぎだし、状況を逐一人事課に報告することになつた。人事課の係員達が時々勤務の合間に寮の見回りに来ていたので僕は「深夜か早朝でなきやダメだ!」、と一喝した。すると或る日の早朝、人事課総出で駐車場・正門に立つて監視していた。それも全員がこれ見よがしにヘルメットを被り、腕には腕

章を巻き・・・「小役人じゃあるまいし、馬鹿な事やめとけ！」思わず僕は一喝した。

その後、僕もやる気を出し、早朝現場を見つけ次第すぐさま調理室に電話で通報すると、賄いのおばさんがエプロン姿で寮の正門に走り、車を止めてとつ捕まえた。何人かが退寮処分になり、人事課や直属の上司からもこつてり油を絞られたはずだ。

あれから20年、寮を出て何処に行つたのか預かり知らぬが、会社では今や彼らは立派な管理職となり、若者達の指導に当たつている筈だ。

「寮のクリスマス」

聖誕祭 若き空腹チキン食う

むさぼ

聖夜の寮 ローストチキン食りぬ

男子寮 大盛り飯食うクリスマス

男子寮 奇声荒げる聖誕祭

遠花火 音のみ届く寮住まい

寮の窓 ひとりの宇宙 遠花火

ヌードの絵 夏日ひねもす男子寮

春昼や一人居の部屋 徒こころ

寮の奇声 寒き廊下を疾走す
湖の橋を渡れば寮署し

男子寮 土用鰻丼夜の賑わい

フルート吹く女を招いて寮の夏
フルート聞く洒落たタベの夏の寮
寝付かれぬ薄暑フルート鳴り続く

「寮のおじさん」

秋の寮 五十男の疎まれし

初明かり 一人で寮の大浴場
悩むこと何処にありや松の内

夏暁 湖を歩いて一人寝る

家守る妻に詫び状 寮の暮れ
妻と子を思ひて寮のクリスマス
退職を決意し寮の夜涼し

夏の雲望み 退社を決意する

「独身寮」

ステームの暑さ 狹おし寮の夜

春の陽は女の温み男女子寮

寮の奇声 寒き廊下を疾走す

寮の窓 ひとりの宇宙 遠花火

夏の寮 妻に秘密の事もあり

冬日陰 天の烙印 湖小さく

湖のスワーンの宿も冬ざれる



寮室から望む常盤湖



常盤湖の白鳥（）

鳥インフルエンザ発生により全ての白鳥・黒鳥400羽は殺処分された。